



七瀬香。

水泳部の部長で、〇校2年生。性格は、真面目で明るく、友人も多い。成績は、学業も部活も並。目下の所、今の生き甲斐は恋愛。担任で、水泳部の顧問である男性教諭に恋をしている。勿論、周りには秘密。

「ターゲットは副部長の範子ちゃんだったんだけど……意外とこの娘も可愛いじゃん」

モニターに映し出された映像に、男は眩く。男は、ストーカー。気に入った女を見つけると、徹底的に後を付け、プライベートを記録する。今は、某〇校の水泳部の女子に目を付け、部室に隠しカメラを仕掛けて盗撮中だった。

「ああ……可愛い……、本物の女子〇生の着替えシーンだ……！AVみたいなヤラセとは訳が違うぜ……！」

男は、香が制服から水着に着替える様子をじっくりと観察していた。

「おっぱい可愛い……！女子〇生のオッパイだ……！成人が制服着てるだけのコスプレAVと違って、マジ興奮する……！ああ……ああ……！」

男は、モニターに映し出される盗撮映像を見ながら、オナニーをしていた。そうとは知らず、素っ裸となって着替えを続ける香。部室には他に誰も居ないので、堂々としたものだった。乳房も陰毛も、まるで隠さない。見られているとは思っても居ないので、当然といえば当然だった。

「おっぱい……！可愛い女子〇生のオッパイ……！大きくないけど……ぶるんぶるんの若いオッパイだ……！最高……！こんなのグラビアじゃ絶対見れね……！ああいく！いく！ああ！！」

びゅるっ！びゅるっ！びゅっ！びゅっ……！

男は、香の形の良い乳房や、小さな引き締まったお尻などをガン見しながら、やがてそのまま絶頂に達し、射精した。

放課後。

時刻は午後6時半を回っている。

香は、一人で部室に居た。範子はもうとっくに帰宅している。こんな時間まで残っていたのには、訳があった。

「えへへ……」

にやける香。実に幸せそうな表情。それもその筈、香は以前から思いを寄せる男性教師と、とうの昔に肉体関係になっていたのだ。今日も、部活の隙を見て逢引き。某教室の準備室で、一発キメて来たところなのだ。

「やっぱ、女子○生の水着姿の誘惑には勝てないよねー」

部活中であるのをいい事に、水着姿で男に迫った香。図らずも水着姿のままのコスプレエッチとなった。

「激しいんだから……先生」

今時の女子○生である香は、性知識も豊富な淫乱娘。恋をすればセックスなんて当たり前だった。もう何でも出来るし、AV女優並にアンアン喘ぐ。それ位、女として当然だった。



暫く、セックスの快感の余韻に浸っていた香。もう帰ろうかと、更衣室の扉を開ける。そこには、見知らぬ男が立っていた。

「……？」

事態が良く飲み込めない香。何故、女子更衣室に見知らぬ男が居るのか。第一、この男は一体誰なのか。そんな事を考える間も無く、気が付くと香は口を塞がれ、両腕を拘束されていた。

「まったく……悪い子だな。女子○生の身でありながら、部活中に学校の敷地内で不純異性交遊だなんて……、しかも相手は教師ときてる。こりやお仕置きが必要だよな」

ようやく、事態を理解した香。この男は、侵入者だ。明らかに犯罪行為を目的に、学校の敷地内に侵入して来た、変質者なのだ。しかし、その認識は僅かに違っていた。男は、そんな痴漢レベルの存在ではなかった。

「大声を出すなよ？出したらただじゃ済まねーぜ」

男の脅迫に、とりあえずこくこくと頷く香。やがてゆっくりと男の手が香の口から離れる。それと同時に、香は思い切り息を吸い込んだ。そして。

「助けてえ！誰かああ——ツ！！」

腹の底から声を出す香。水泳部なので、肺活量は人並み以上だ。きっと誰かにこの声は届くだろう。そうすれば、この男は逮捕されて終わりだ。まだ校舎内には、人が残っている。誰かが声を聞きつけて、助けに来てくれるだろうと。そう考えたのだが。

がっ！と、香の細い首を両手で掴む男。  
それ以上、声が出なくなる。

「声を出さなくて言ったはずなんだがな……」

ぎりぎり……と香の首を締め上げる男。女が相手だというのに、一切の容赦が無い。

「が……………あえ……………」

気道どころか、血管までが塞がれ、一切の呼吸も、声を出す事も出来ない。苦痛に、白目を剥く香。脳に酸素が回らず、視界は失われつつあった。

「いい表情だぜ……ああ……」

男は、香の苦悶に満ちた表情を見て、勃起していた。

「お前、結構可愛いよな……そりゃそーか、教師を落とすくらいなんだもんな……」

男は、ストーカーである。香が教師とデキている事など、とっくに知っていた。さっきも、二人の秘密の現場を覗いて全部録画していたのである。

「……………っ、……………、……………」

酸素を求めて、舌を突き出し、口をぱくぱくと動かす香。だらしのない表情。美意識の高い、恋する女子高生である七瀬香の姿は、もうどこにも無い。とても人には見せられない表情だった。ついさっきまで、この美貌を使って、一回り以上も年上の男を誘惑し、ペニスを勃起させ、激しくセックスをしていたというのに。

「さっきまではあんなに可愛く喘いでたっつのに……なあ、水泳部の部長、七瀬香ちゃんよ……！」

がくがくと身体を揺さ振られ、頭を前後に揺らす香。もう、思考は止まっていた。酸欠である。動く事も、喋る事も出来なかった。

「死ぬんだぜ、お前はこれから……、可哀想にな……さっきまで好きな男とセックスしてたっつのに……。まあ諦めな、お前が可愛いのが悪いんだから。……じゃあ死ねよ、淫乱女子〇生」



男の手が、香の細い首を握り潰す。

恐るべき握力。

ぎゅぐきっ！！という鈍い音が生、香の気道、血管、その他諸々の重要な部分が、首の骨とともに粉碎された。

「……っ！……っ！！」

香の身体が、びくん！と跳ねる。腕や足が、がくがくと震え、無造作に動き回る。

瞬きの止まった眼球は、真っ直ぐに男を見詰めていた。

「ああ……可愛い……！俺の事、そんな目で見るなよ……ボッキしちまうだろ……！」

男は、限界まで張り詰めたペニスを露出し、香に向けてしごきまくっていた。香の無残な姿を見ての、オナニーだった。

「死んだ瞬間の女って、何でこんなに可愛いんだよ……！ああ……最高に気持ちいい……！ああ……ああ……！」

男は、女を殺害する事に性的興奮を覚える、殺人鬼だった。今日は、完全に香を殺すつもりで来たのだ。勿論、その様子を見て、オナニーをしてやるつもりだった。

「ああ可愛い……！こんな可愛い女子高生をブチ殺しながらオナれるなんて……！こんないい日は滅多に無いぜ……！ああ……！」

男は、殺人鬼。人を殺して、その様子を見てオナニーする事や、死体をレイプする事など日常茶飯事だったが、これ程の美少女を殺害する機会など、滅多に無かった。やはり、この世の中で美少女と言われる存在は、稀なのである。

「いく！いく！いくぜ七瀬香！お前のついさっきまで生きていた身体を見ながらビュってイって出さず！お前の身体によ！ああ！あ——ツツ！！」

びゅるっ！！びゅっ！びゅっ！びゅっ！！

最高の興奮の中で、絶頂に達し、射精を迎える男。ここ数ヶ月の中で、最高の快楽だった。凄まじい量の精液が、香の水着に掛かる。

「で……出る……！ああ出る……っ！すっげー出る……！ああ……！」

見ず知らずの男に、直に精液を吐き掛けられているというのに嫌がる素振りも見せない香。当然だった。香はもう死んでいた。首の骨が折れているのだ。生きていられる筈がない。顔中を涙と涎で濡らしながら、香はいつまでも光を失った瞳を虚空に向けていた。



長い長い射精が終わると、男は物言わぬ香の身体を、壁に預けて立たせる。かくん、と香の頭が、ありえない方向へと曲がる。首の骨が完全に折れていた。頭を支えられる筈がない。

「可愛い……」

男は、香の頭を両手で掴むと、恋人にするようにキスをする。

ちゅぱ……ちゅっ……

冷たい唇に重なる、男の唇。舌が差し込まれ、突き出された香の舌を絡め取る。

「香……」

何度も何度も角度を変えながら、重ね合わされる唇。香は、目を見開いたまま、全く抵抗せずに男のキスを受け入れていた。

「セックスするぜ……香」

男の手が、香の胸を水着越しに揉む。柔らかい感触。パッド入りの競泳水着を通して、○7歳の女子○生の、瑞々しい乳房の膨らみと、柔らかさが、掌に伝わって来ていた。

「香……んっ……」

唇を重ねながら、腕で香の身体を支えつつ、尻を触る男。水着を着た、ほぼ生の尻を男の手がむにゅむにゅと揉みしだく。

「やっぱこのくらいの娘の尻はいいな……小さくて形も良くで……  
柔らかくて弾力もあって……、どっかのバカとは大違いだ……！」

香の若い肉体を味わいながら、男は再び勃起していく。香の身体は、服を着ている時には分かり辛い、かなりバランスの取れた美しい身体だった。男が勃起するのも無理は無い。

「香……！ ああ……香……っ！」

男は、香に水着の肩紐に手を掛け、下げる。ぶるん、と顔を見せる乳房。男は、それを見て、猛烈に興奮し、勃起した。

「やっぱ生は違うぜ……！ 女子○生のおっぱい……！」

すでに盗撮映像で、何度も香の乳房は見ている。しかし、実際生でそれを目撃する興奮は、やはり計り知れない。自分で水着を脱がしている、という事実にも興奮していた。

ちゅぱ、ちゅぱ……っ

はだけられた、水着越しの乳房。大きくは無いが、形の良い白い乳房は、壮絶な美しさだった。男は夢中になってそれにしゃぶりつく。

「気持ちいいだろ……？ おっぱい吸われるの好きだもんな……！」

香の、教師とのセックスを覗き見ていた男。香が、乳房を吸われた時の可愛らしい喘ぎ声を覚えていた。香は、恋する女子○生。乳房は女の最高の武器だし、性感帯でもあるのだ。

「汚い垂れたオっぱイのキ○ガイ女とは訳が  
違うぜ……！ 最高……！」

ちゅぱちゅぱと香の形の良い乳房に吸い付き、舌で嘗め回す男。香の弾力溢れる乳房がぶるんぶるんと揺れ、波打つ。

「チンポボッキするぜ……！」

男のペニス、もう完全に勃起していた。香の身体に押し当てられ、愛液を滴らせている。射精したいとでも言わんばかりに。



どさ……っ

「ああいく……ああいく……！あああ……！」

上半身を露出した姿の香を床に寝かせる男。  
そして、その様子を見下ろしながら、ペニスを  
握り締める。

絶頂に近い男。殺人鬼である男は、女の死体が  
最も興奮出来るズリネタだった。真性の変態である。

「すげー、若いっていいな……！！」

仰向けになっても形の崩れない乳房に、  
男は若い女の無限の可能性を感じる。  
昨夜レイプし殺害した女は、32歳だったが、  
乳房は垂れてるし、染みだらけの酷い  
身体だった。女は、手入れを怠るとこうなる  
という典型だった。

「さっきまでのお前を思い出すと……ああ……！  
教師にチンポハメられて、尻を振りながらオツパイ  
見せて……！アンアン喘ぎまくってよ……！  
すっげエロかったぜ……！今時の女子〇生は  
みんなあなのかよ……！ブチ殺したくなるぜ  
……！みんな殺しまくって、レイプしまくって、  
ピュってザーメンぶっ掛けたいくなるぜ……！ああ  
……！いく！いく！ああ！あ——っ！！」

「まあ若くても終わってるバカもいるけどな」

男は、壮絶に美しい女子〇生の裸を  
眺めながら、オナニーを続ける。  
つい30分ほど前まで、教師である男を  
誘惑し、セックスをさせるまでに至った  
魅惑の若い肉体。それは、殺人鬼の  
男ですら勃起させる程の魅力を持っ  
ていた。

びゆるっ！！びゆるっ！！  
びゅっ！！びゅっ！！

香の形の良い白い乳房に、ドロドロの  
熱い精液が飛び掛る。ついさっきまで、  
別の男のペニスを膣内に飲み込み、  
中で射精された身であるにも拘らず、  
さらに別の男の精液を、その身体に  
浴びせ掛けられていた。

「そりゃ教師でもボッキしちまうぜ……  
こんなエロくて可愛いんじゃあよ……」

「ああ……可愛い……すっげー可愛い  
……！ほら……出てるぜ……！」

香は、平均的な〇校生女子と  
しては並以上の容姿を持っている、  
美少女だった。女としての美しさに  
こだわりを持っている。恋をして  
いるのだから当然だった。

ペニスを柔らかい乳房に押し付けながら、  
びゆるびゆると射精を繰り返す男。乳房、  
腹部、そして下半身を隠す水着にまで、  
男の精液は注がれて、香の身体を白く  
汚していった。

「ああエロい……！誰かを  
好きでいる女って、どうして  
こんなに可愛いんだよ……！」

「マンコ見せろよ……女子〇生マンコ……！」

香の乳房を食い入るように見詰めながら、  
ペニスをしごきまくる男。

男は、射精を続けながら、香の水着を更に  
脱がしていった。

「可愛い……！可愛い……っ！ああ……！  
可愛いよ香……っ！！」

がくん、がくん、と力無く身体を揺らす香。  
男の前で全裸の姿を晒し、その身体を  
犯されていた。

「チンポ入る……っ！ほら……！こんなに  
お前の中にチンポ出入りしてるぜ……！！」

ぐっちゅ！ぐっちゅ！と音を立てて出入りを  
繰り返すペニス。香の膣内は、先程セックスを  
していた教師の精液で溢れ返っており、男の  
ペニスを受け入れながら淫らな音を立てた。

「やっぱ女子○生は違うぜ……！肌も  
ぷるんぷるんでよ……！おっぱいも  
お尻も弾力が違うぜ……！！」

ぱん！ぱん！と鮮やかな音を立てて  
鳴り響く肌。衝撃で全身が揺さ振られ、  
形の良い乳房が上下に揺れる。

「教師に見せたんだろ？この可愛い  
おっぱいをよ……！いいのか？教師に  
おっぱいなんか見せて……このエッチな  
女子○生が……！」

男は言うが、別に驚きはしない。  
恋する女の子が、男と同じ位  
エッチな事が大好きなのは  
常識だった。淫らな事が嫌い  
なのは、自分の容姿が醜くて  
人に見せられないだけなのだから。

「香……！ああ香……！可愛い……！」

香の頭が、がくがくと揺さ振られ、次第に  
妙な方向を向いていく。首の骨が折れている  
ため、どんな方向でも向く事が出来た。

「自分がレイプされてるって事も分かんねえんだよな……  
もう……、ああ可愛い……！オッパイ見られてるってのに  
……恥ずかしくねえのか……？なあ香……！」

好きな相手でもない男に、乳房を見られ、それでも  
羞恥に頬を染める事もない。香は、もう死んでいるのだ。  
恥じらいなどある訳が無かった。

「教師のザーメンぶっ掛けられたんだろ？何度も  
……！このおっぱいによ……！女子○生の  
おっぱいに……！ああ……可愛い……ああ……！」

ぷるぷると形を変えて揺れ動く  
精液塗れの乳房を眺めながら、  
男は興奮を高めていく。他人の  
精液が溢れる膣内で、男は射精  
しそうだった。

「いく！いく！出すぜ！香！お前の  
マンコの中に！中出しするぜ！  
妊娠しな！死んでるからもう妊娠  
しねーけどな！ほらっ！！ああ！！」

びゅるっ！！びゅるっ！！びゅるっ！！

男は、物言わぬ死体となった美少女の身体を  
犯しながら、その無表情な顔と、冷たくなった  
乳房を眺めながら、思いの丈を放つのであった。

その後、香の死体は男の手によって  
じっくり、たっぷりと陵辱され尽くした。  
その様子は、全て撮影され、ズナッフ  
映像として闇の世界へと流された。  
高額で取引されるそれは、ネットにも  
流れ、香の関係者も全て目撃する  
事となった。密かに隠れ美少女として  
人気の高かった香の裏映像は、多くの  
男子を興奮させ、ズリネタとして射精  
させていった。



「ああ……可愛い……！七瀬……！七瀬……！」

香の水着姿の写真を見ながら、オナニーをする男。  
香とは同じ学校の生徒。性欲溢れる若者で、同級生で  
クラスメイトである水泳部の部長、七瀬香の隠し撮り  
水着写真を入手し、ズリネタとして使用していた。

「七瀬……制服姿だと地味だけど……！水着だとこんなに  
エロいなんて……！ああ……オッパイ可愛い……！」

水着姿だと、身体の線が明確に現れる。  
スレンダータイプの香の悩ましい曲線美は、  
裸に近い格好でこそ際立った。

「この薄い布のすぐ向こうに……  
可愛いオッパイが……ああ……  
ああ……いく！いく！ああっ！」

びゅるっ！！びゅるっ！！

香の写真に、思い切り精液を  
吐き掛ける男。最高の快樂での  
オナニーだった。

「可愛い……七瀬……処女  
なんだろうな……こんなに純情そう  
だもんな……」

精液を吐き出しながら、その清純そうな  
笑顔を精液で汚していく事に快感を感じる男。  
勿論、香が教師と肉体関係にあって、今まさに  
セックスをしまくっているなどとは想像もしていない。

「ああ……超可愛い……惚れそう  
だぜ……七瀬……」

香の顔に、ペニスの先を押し付け、吐き  
出される精液を擦り付ける。写真の香は、  
男の射精にも嫌悪感を示さず、笑顔を  
向けていた。



生徒から没収した、写真。そこには、教え子である七瀬香の水着姿が映されていた。おそらくは、男子生徒の間でズリネタとして出回っているのだろう。

「七瀬……可愛いぜ……」

教師である男は、香の写真を見ながらオナニーをしていた。つい数時間前も、この写真に写っている相手と、セックスをしたばかりである。一度抱いた女なので、愛着が湧いていた。

「こんな純情そうなのに……あんな……」

香は、恋する女子〇生。その性欲は凄まじく、好意を寄せている相手にはAV女優並の淫乱女と化して迫る。セックスの事を思い出すと、勃起が止まらない。

「意外とあるんだよな……胸」

制服姿では気付かなかったが、スレンダータイプの香の胸はBカップ。しかし、痩せているのでその胸の形は美しく、乳房として存在していた。両手で激しく揉むと、可愛らしい声を出して喘ぐ。

「俺に授業受けている時も……いつもいつもセックスしたくて堪らなかったんだろ……？  
なあ七瀬……！あんなに喘いで……『大好き、気持ちいい』って連呼してよ……この淫乱女子〇生……！まだ〇7歳のくせに……！  
ああいく！いく！また出すぜ！さっきみたいに！」

びゅっ！びゅるっ！！

男は、香の写真の顔や胸の部分に、精液を吐き出す。膣内に射精するのとまた違った快感がそこにはあった。

原田範子。

水泳部の副部長で、香以外では唯一の、真面目に部活に参加している部員である。

「……………」

今日は、水泳部の主な練習場所である学校のプールはほぼ貸切。部員である4人のうち2人は幽霊部員。そして部長である七瀬香は、どういう訳か今日は来ていない。副部長である範子一人での部活だった。

「まあいいけどね……………」

基本、水泳は個人競技である。一人でも練習は出来る。範子は、スマートなスタイルで水に飛び込む。まるで人魚のような美しい動き。ベリーショート of 髪が水の中で揺れる。しなやかな長い腕と足が水を掻き沸ける。息を呑むほどに美しい動き。範子は、学校では知らない者は居ない程の美少女だった。日本人離れした美貌。整った顔立ちに、スタイル抜群のグラマラスなボディ。水泳部というより、グラビアアイドルの方が似合いそうな、恐るべき色気だった。

「やっぱこの娘、最高だな…………、間違い無くこの学校では最高の美少女だ…………！」

モニターに映し出される映像を見ながら、欲情を高めていく男。学校内にカメラを仕掛けて、盗撮までしている本来の目的は、この水泳部の美少女をストーカーする事が目的だった。

「泳ぐの上手いな…………こいつきっと、セックスも最高に上手いぜ…………」

運動神経とセックスのテクニックが正比例する事は常識だった。実際、男は数多くのレイプ体験から、それを良く知っていた。

「お前もそうだもんな、香」

さも親しそうに、男は部屋の隅に寝転がる少女にそう問い掛ける。七瀬香。水泳部の部長である少女は、男のすぐ傍に居た。

「ん？何だ…………チンポ欲しいのか」

男は、香の元へと来ると、全裸である香の股を開かせ、勃起したペニスを挿入する。にゆるり…と、精液塗れの膣内へと、潜り込んでいく男のペニス。

「部員は真面目に部活中だったのに、お前は呑気にセックスかよ…………この淫乱女子〇生が」

香を殺害し、その身体を死姦しているというのに、勝手な事を言う男。殺人鬼である男にとって、女を殺してレイプする事など、愛し合う男女がセックスをする事と同じ位、普通の事だった。

「可愛いよな、お前の友達」

画面に映し出される、水着姿の美少女。それは、芸能人でも通用する程の美人で、スタイル抜群のプロポーションを持っていた。大抵の男は、この水着姿だけで1000回はオナニー出来るだろう。

「ああ…………レイプして…………、セックスして…………！あの水着をひん剥いて…………おっぱい剥き出しにさせてチンポハマて…………！なあ香…………！今のお前みたいによ…………！ほら！ほら！」

「ぱん！ぱん！ぱん！ぱん！」

力なく投げ出された腕や足が、がくんがくんと動く。死んでいるので、一切の抵抗をしない。瞬きの止まった瞳は、光を失ったまま天井を見詰め続けていた。

その後も、男はモニターに映る範子の水着姿を眺めながら、香の身体を何度も何度も犯し、射精した。それは、香の身体を使ったオナニーだった。

「や……………め……………」

ばん！ばん！ばん！ばん！

静まり返った水泳部の更衣室に、肌のかき合い音が響き渡る。時刻は、午後8時。もう校内には誰も残っていなかった。ただ三人、水泳部員である範子と、その身体を犯している男だけが居た。

「……………っ、……………っ！！」

首をロープで縛られ、天井に吊るされる範子。爪先は、かろうじて地面に届き、範子の全体重を指先だけで支えていた。

「ほらほら……ちゃんと立てよ……、死んじまうぜ？」

苦しむ範子の身体を、楽しそうに犯す男。放課後、学校の敷地内に侵入した男は、範子を昏睡させ、学校から人が居なくなるまで待機。そしてそのまま、範子の自由を奪った後で、その身体を犯し始めた。

「く……………苦し……………」

叫ぼうにも、声が出せない。暴れようにも、爪先立ちなので首が絞まる。もうどうしようもなかった。例え声が出たとしても、もう学校には誰も残っていなかった。助けなど来る筈が無かった。

「そりゃそうだろ、苦しませるためにレイプしてんだから。誰がお前を気持ち良くさせるためにセックスするかよ、このヤリマン女が」

範子を犯した際に、処女でない事は確認済みである。範子は公では男嫌いとして有名であり、不可侵の美少女として男子からの人気も高かった。そのボーイッシュな容姿から、女子からもカリスマの人気を誇る範子。しかし、実際は歳の離れた従兄妹と不倫関係に溺れている、性欲少女なのだった。範子は、思春期の女子〇生。恋をするのは当然であり、好きな男が居れば、その相手とセックスをしたいと思うのは普通の事だった。

「あーあ、こんなに可愛いのに……実際はセックス大好きなヤリマン女子〇生だなんてな……残念だぜ、処女をレイプすんのが俺の楽しみの一つなのに」

男は、範子を拘束した際、意中の相手とどんな関係なのか、どんなセックスをしているのか、好きな体位は、中出しはするかなど、全てを聞き出していた。それを想像し、男は興奮した。少女で無い以上、後はヤリマンビッチとして扱い、レイプを楽しむしか無かった。男は、女を人間とも思わない異常者なのである。

「昨日もセックスしてたんだって？可愛い奥さんが居る新婚の男をたぶらかして、ヤリまくりの中出しさせまくり。まあこんないい女に迫られたら、新婚の男だってイチコロだろうけど」

範子は、異常者である男から見ても分かる程の美少女だった。彼女に迫られたら、同性愛者以外は拒む事は困難であろうと思われた。

「なあ、美少女に生まれるってのはどんな気持ちなんだ？多くの男のズリネタに利用されるって気持ちはよ……！」

犯される範子の身体を、目の前に置かれたビデオカメラが冷静に撮り続ける。範子がレイプされる様子を、全て撮影し、全世界に公開する予定だった。

「こんなにエロくて可愛いオッパイは、全世界に見せてやらないとな……！美しいものは、皆で愛でるもんだ。ブスは誰も見たくなーけど」

男は、範子の腕を掴み、後ろから犯し続ける。ばんばんと尻が鳴り、形の良い乳房がぶるぶると揺れ動く。範子は、快感と苦痛に、悶絶しながら、表情を歪め、空気を求めて舌を突き出していた。

「ああ……可愛い……その表情……！香ちゃんもそんな顔してたぜ……！死ぬ間際によ……！ああサイコー……！超興奮する……！チンポボッキしてザーメン出ちまうぜ……！！ああ……！！」

「……！……！……！」

ぱんぱんぱんぱん！！

激しく打ち鳴らされる尻。範子の細い手首を掴む男の手に力が入る。下に向かって腕が引かれ、範子の首を締め上げるロープが、柔肌に食い込んでいく。

「……………っ！……………っ！……………っ！！」

かろうじて酸素を取り込んでいた気道が、完全に塞がれる。目を見開き、舌を突き出す範子。酸欠で、もう目も見えず、瞬きも出来ない。もう数秒で、範子は絶命する。その様子が、男を猛烈に興奮させた。男は殺人鬼であり、女が死んでいく様子を見ながら射精するのが、最も興奮するセックスだった。

「ああ興奮する！興奮する！こんなに可愛い女を殺しながらレイプ出来るなんて……！もう一生ズリネタには困らねえぜ！おら死ねよ！死ね！死ぬんだよ範子！こんなに可愛いのにもうお前は誰ともセックス出来ずに死ぬんだよ！安心しな！全世界の男が今のお前でオナニーするんだから幸せだろ！？ああ可愛い！可愛い！ああ！あ——ツツ！！」

白眼を剥き、全身を痙攣させる範子。ロープに締め上げられた首が有り得ないほどに引き伸ばされ、突き出された舌は、男を求めるように長く伸びていた。男は、その範子の表情を見ながら、思い切り射精する。

「ああ！ああ！っああ！！ああ………最高………っ！ああ……！！」

びゅく……！びゅく……！びゅく……！

既に精液で溢れ返った範子の膈内に、更に精液を注ぎ込んでいく男。殺人鬼で異常者の男は、精力も絶倫だった。女の裸があれば、無限に射精出来る。男は、範子の形の良い弾力溢れる巨乳を揉みながら、射精の快楽を味わい続けた。カメラが撮影を続ける、その前で。

「あーあ、死んじゃった……こんなに可愛いのに」

目の前で、宙吊りのまま動かない少女。爪先はもう身体を支えておらず、苦悶に手足をばたつかせる事も無い。締め上げられたロープが、範子の細い首を完全に塞ぎ、呼吸を止めていた。窒息死だった。

「どんな気持ちだ……？自分を殺す男にレイプされながら、その様子を全部撮影されていくって言う屈辱はよ……」

男は、突き出された舌に自分の舌を絡め、唇を重ねていく。絶命した少女とのディープキス。変態で異常者の男は、死体を愛撫するのも趣味だった。

「おいおい、初対面の男が目の前に居るんだぜ、ちょっとは身体を隠せよ」

一糸纏わぬ全裸の姿を晒す範子。男の前だというのに、羞恥に身体を隠そうともしない。当然だった。もう範子は死んでいるのだから。

「本当は見られるの好きなんじゃねーの？水泳部の淫乱範子……！」

好きな男の前では、淫乱の変態である範子。普通の変態である女子〇生であるため、露出の気があるの当然だった。好きな男の前ですら裸を見せながらいない女は、身体が醜い女だけである。

「可愛いなホント……超ボッキするぜ……！」

男は、全裸の範子の死体をじっくりと眺めながら、再び漲っていく自分を感じていた。

「はあ……はあ……はあ……すっげー可愛い……！」

物言わぬ範子の死体を見ながら、ペニスをしごきまくる男。異常者の男は、本物の死体が目の前にあるというのに、猛烈に興奮していた。

「この顔で……このオッパイで……しかも男嫌いのくせにヤリマンなんて……どんだけエロいんだよ……！ああいく！いく！もういく！ああっ！！」

びゅるっ！びゅっ！びゅっ！！

範子の乳房目掛けて飛び掛る、男の精液。もう既に何度も射精した後だというのに、その勢いは衰える事を知らなかった。男は、殺人鬼である。女の死体が、何よりも興奮するのだ。吐き出される精液の量は尋常では無かった。

「ああ……！ああ……っ！出る……すっげー出るっ……！」

びゅる……びゅる……と次から次へと吐き出される精液。範子の巨乳を、あっという間に白く汚れていく。

「ホントエロいよな……範子……まるで男を勃起させて射精させるためにあるようなオッパイだぜ……」

範子の、芸術的なまでに形の良い乳房を眺めながら、男は射精の快感に酔い痴れる。美しい乳房を見ながらの射精は、最高の快楽だった。

「醜く垂れたオッパイほど最悪なモンは無いからな。それに比べるとお前のオッパイは最高だぜ……なあ、自分でもそう思うだろ？淫乱範子……！」

好きな男の前では、さすがの範子も裸を見せたいと思うし、セックスをしたいとも思う。恋愛関係では、セックスをするのが当たり前であり、セックス大好き人間を軽蔑する女は誇り高く美しい女でも何でも無い。ただ醜い自分を見せられないのが悔しいだけなのである。

「何だ、そんなに俺がピュってしたのが嬉しいのか？身体を隠しもしないで見せて……。いいぜ……じゃあもっともっとしてやるよ……今度はお前のお尻にぶっ掛けてやるぜ……！」

男は、その後も範子の身体を視姦しつつ、己が欲望を吐き掛けていった。勃起するペニスは萎える事無く、範子の身体に精液を射精し続けた。美少女である範子。顔だけでも多くの男を射精に導いて来たというのに、範子の身体は服の下も壮絶な美しさだった。これでは、興奮が治まる筈も無い。

「こんなエロくて可愛い身体はよ……、世界中の男に見せてやらなきゃな……！そう思うだろ？範子」

男は、範子の身体を汚しながら、その様子を撮影する事も忘れない。何せ、これだけの美貌だ。一生ズリネタとして重宝する事になるだろう。

「お前に憧れている男が、学校だけでも何人居るかな……？そいつらは幸せだぜ……これから本物の範子のオッパイを見る事が出来るんだから……！」

異常者である男は、殺人鬼でありながら、博愛心に溢れていた。

その後、範子の死体は香と共にプールに浮かんだ状態で発見された。二人の死体は全裸であり、全身が精液塗れで、膣内も直腸も胃の中も肺の中も、全て精液で溢れていた。陵辱行為を受けていた事は明白だった。

翌日から、女子高生二人の陵辱行為、スナッフ映像がネットに出回った。その手の映像は珍しく無いが、何せ映されている少女のクオリティが高く、大評判となった。二人の陵辱、死姦映像は、同じ学校の生徒を含め、数多くの男のズリネタとして愛された。



「ああ……原田……原田……！  
超エロい……！サイコー……！  
おっぱいデカいって思ってたけど  
……こんなになんて……！ああ  
いく！いく！いく！ああ……！」



「足長げー……！ウエスト細せー……！  
ああ……オツパイ外人並だぜ……！  
こいつホントに日本人かよ……！ああ  
……すっげーボッキする……っ！」

「ああん……原田先輩……！  
原田せんばあい……！素敵……！  
素敵ですう……！大好き……！  
綺麗で、可愛くて……！エロくて  
最高……っ！ああん先輩が……  
どこかの男に犯されたりなんか  
してるの想像すると……！ああん  
イっちゃうう……！はあ、はあ、  
このお尻に……！男のぷっとい  
チンポがあ……！ああいくう！  
イっちゃうう！！」

その凄まじい美貌と、〇校生離れした  
グラマラスなスタイルで、男女問わず  
圧倒的な支持を誇る範子。その  
生写真は、男にも女にもズリネタとして  
愛されていた。

「範子……！範子……！好きだよ  
範子！エロくて可愛い範子が好きだよ！  
ああいく！いく！出るよ！出すよ！  
範子に出すっ！ああ！！」

びゆるっ！びゅっ！どぶっ！



「この尻に……チンポブチ込みたいぜ  
原田……！そして……アンアン喘がせ  
ながら中出ししたいぜ……！ああ……！  
出るぜ！出すぜ！中に！中に！ああ！  
あ——っ！！」

ぶびゅっ！びゅっ！びゆるっ！

その美しい容姿と、凜とした顔立ち  
だけでどれだけ多くの男を射精させて  
来たか知れない範子。その水着姿とも  
なれば、結果は言わずもがな。範子の  
水着写真は、多くの男子を勃起させ、  
射精に導き、精液を注がせ、どろどろに  
汚された。

当の本人は、自分にそんな価値は無いと  
思っており、まさか自分の生写真が高値で  
取引され、多くの男子生徒に精液を  
吐き掛けさせているなどとは露ほども思っ  
ていなかった。

「奥さん居るんだぜ？俺……  
まったく困った娘だな……  
載ちゃんは……ほら、チンポ！」

「ああん……！光ちゃん……！  
光ちゃああん……！あんっ！  
あんっ！気持ちいい……！  
ああ……！ああはっ！あっ！」

男嫌いで有名な範子は、今日も  
想い人と不倫関係に溺れていた。

生徒から没収した写真の中には、香とは別に、原田範子の写真も含まれていた。その写真を見ながらオナニーをする教師。

「七瀬には悪いけど……原田の方が好みだな……、美人で……グラマーで……！」

どちらかというと、香より範子の写真でオナニーをする事が多い男。はっきり言って、香とセックスをする時も、射精する時も、範子の事を想像している事が多かった。

「七瀬じゃなくて……原田とセックスしたいぜ……！このデカイオッパイを是非拝みたいもんだ……！」

香から、範子がいかにエロくてスタイル抜群の身体なのかを聞かされている男。毛深い事も、陰毛も茶髪である事も、少しのたるみも無い乳房の形も、乳輪が大きめのピンク色である事も。想像すると、最高に勃起した。

「ああ……原田……原田……！まだ〇7歳とは思えないぜ……そのデカイオッパイ……男に見せた事はあるのか……？チンポ挟みたいぜ……！」



範子の大きな乳房の膨らみを凝視しながらペニスをしごきまくる男。教師という身でありながら、生徒をズリネタにオナニーをしていた。

「いく……っ！」

香の喘ぎ声や、肌の感触を思い出しながら、それを目の前の写真に映る範子に置き換える。クールな佇まいの範子がセックスの快感に喘ぐ姿は、想像とは言え猛烈に興奮した。一気に絶頂に向かう。

びゅるっ！！びゅるっ！びゅっ！

範子の写真に、吐き出されていく白い精液。つい数時間前、範子の友人である香の膣内にも射精された、男の精液だった。

「中出ししてるぜ……原田……！」

自分に好意を持ってくれる女を犯しながら、別の女の事を考えつつ射精する。それは背徳感もあつてか、猛烈な興奮を伴い、凄まじい量の精液を放出させた。

びゅるっ……！びゅるっ……！

範子の写真は、あっという間に白い精液で埋め尽くされていった。























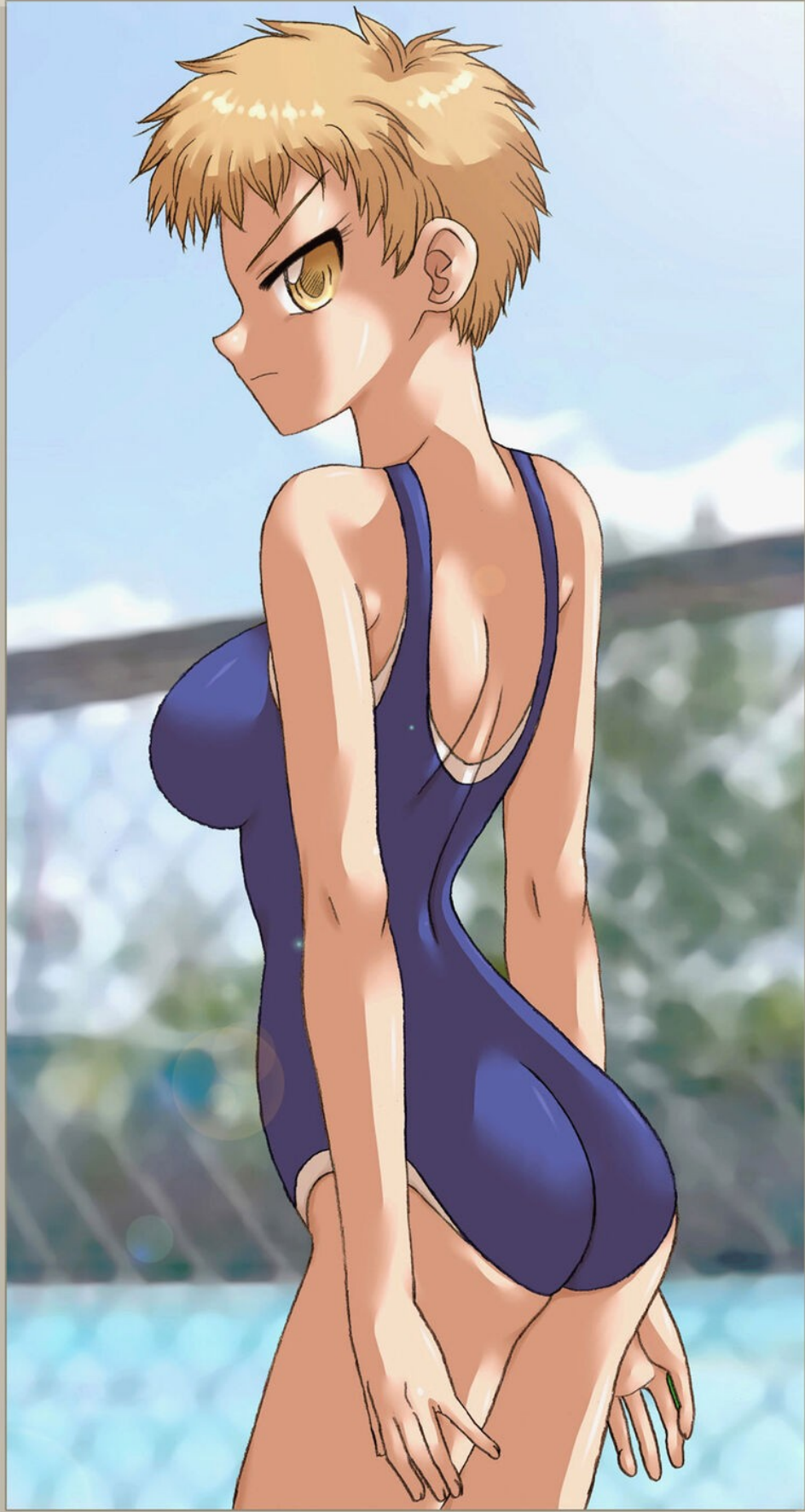


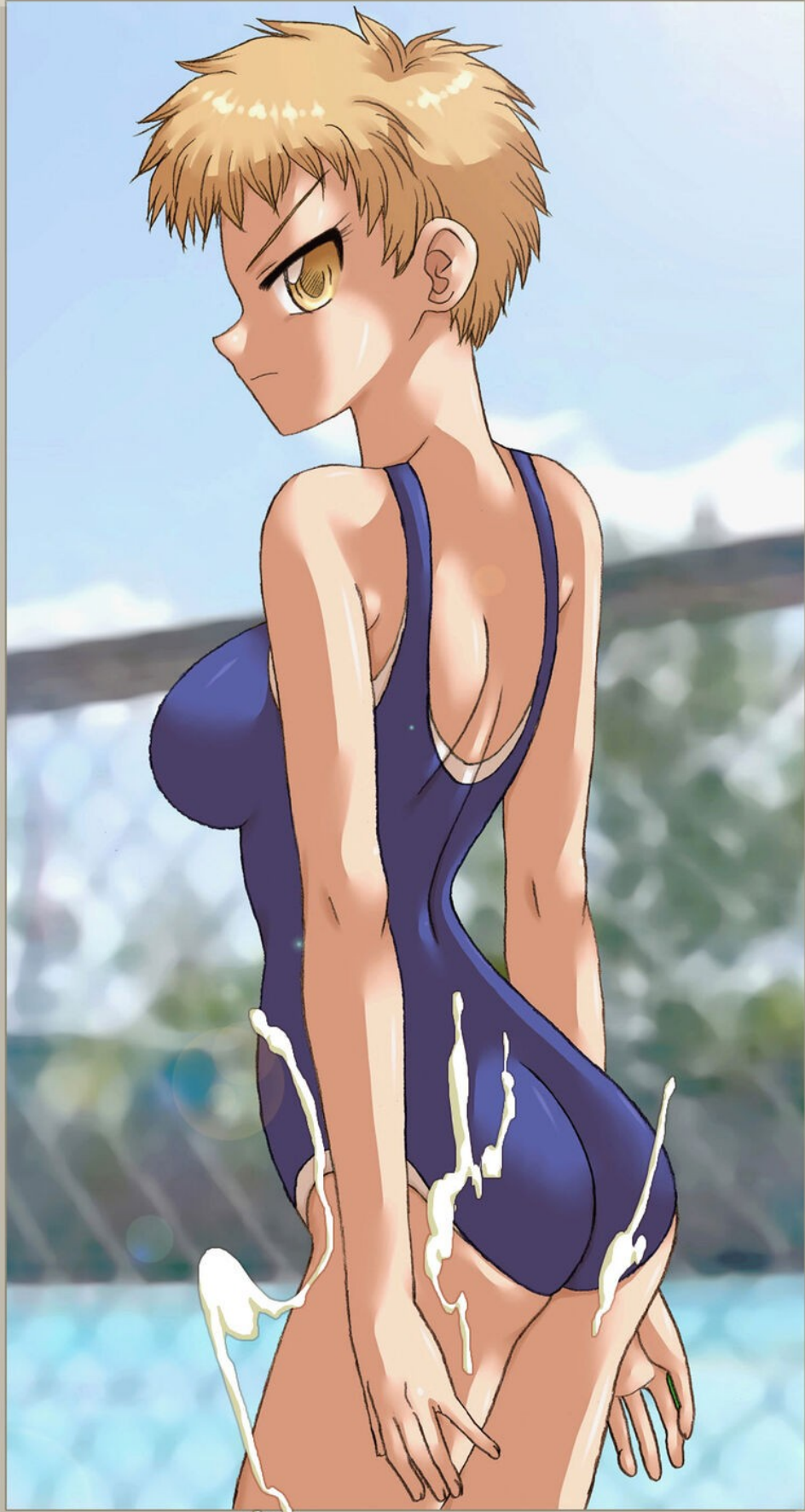


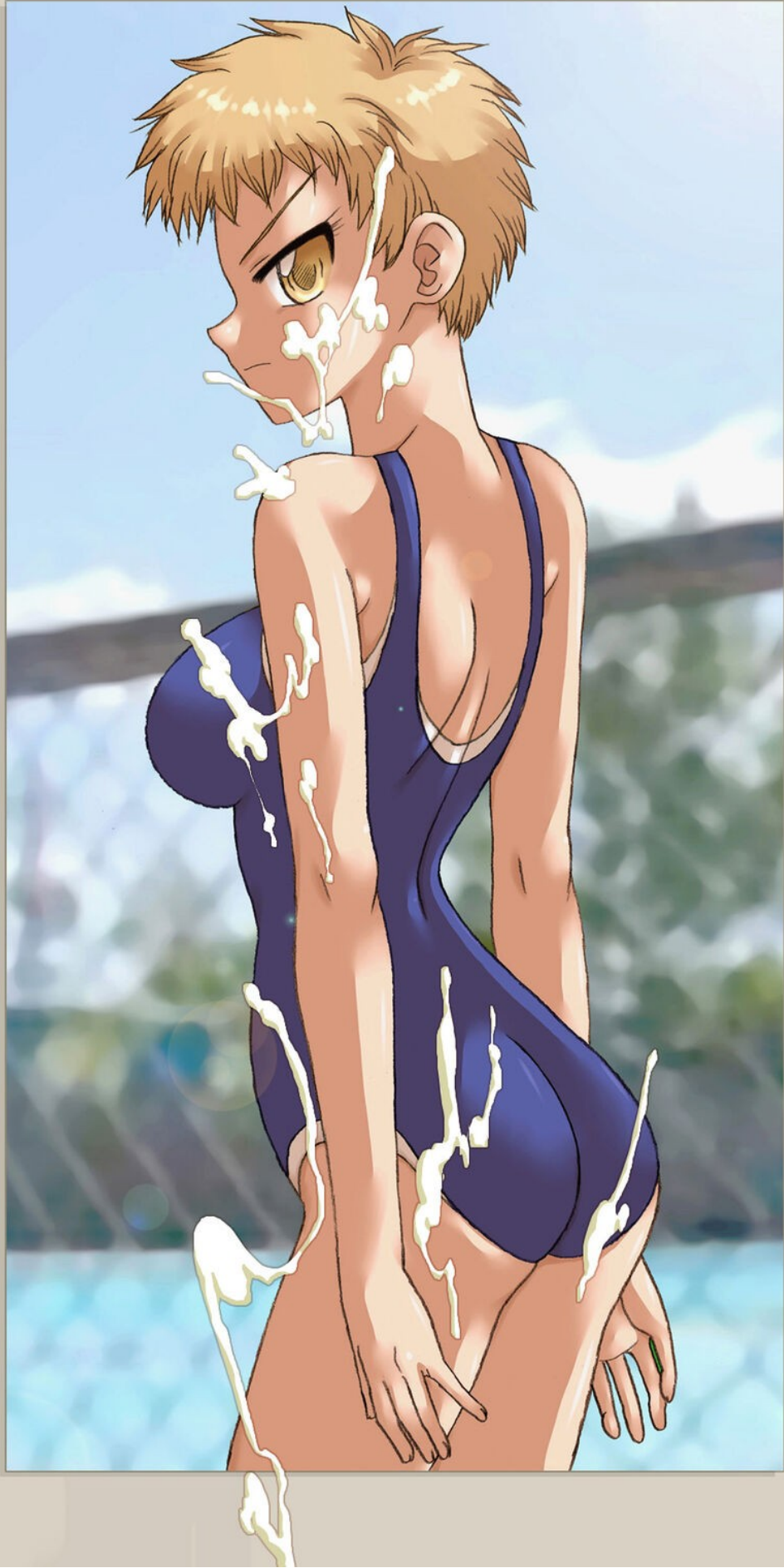














Reminder that translations are not only welcome,  
they are in demand!

提醒一下，不仅欢迎翻译，  
他们很抢手！

翻訳を歓迎するだけでなく、  
彼らは需要があります！

번역도 환영합니다  
그들은 수요가 있습니다!